

双子が愛する 特別なミルク

上野動物園（東京都台東区）のシャイアントパンダ、オスのシャオシャオとメスのレイレイは園で初めて誕生した双子だ。最近、性格の違いもはっきりしてきたという2頭の成長に欠かせないのは、約30年前に開発された特別なミルクだ。皿に注がれたミルクが床に置かれると、2頭はさっそく鼻面を突っ込んだ。最後の1滴まで飲み干すと、口の周りの毛にはミルクが滴っていた。園が今年5月に撮影した2頭の様子だ。昨年6月の誕生後、園では母親のシンシンに交互に子を渡す方法を採った。一般的にパンダは双子を生んでも1頭しか育てないと言われている。2頭が十分に育つには母乳が足りない場合もあるという。そのため、母親と過ごす間は母乳を、それ以外の日は飼育係が主にミルクを与えた。中国側の指導の下、生まれてすぐはヒト用とイヌ用の粉ミルクを混ぜて与えた。生後2カ月を過ぎると、母乳の成分に近く、よ

30年前 研究者と獣医師の熱意

り消化の良い特製の「パンダミルク」を与えた。開発したのは、森永乳業の研究者だった高津善太さん(77)。当時、園でパンダ担当の獣医師だった田邊興記さん(81)の妻和子さん(74)との出会いがきっかけだった。

1987年の年末、園ではホアンホアンがトントンを出産し、子育てに励んでいた。園によると、パンダは双子を産む確率が50%前後。今後の繁殖次第で、母親が面倒を見ない1頭には人工乳が欠かせない。興記さんはその必要性を感じていた。

獣医師の和子さんは研究のため、東京大学医学部付属病院に通っていた。隣の研究室でバイオ医薬品の研究をしていたのが高津さんだった。高津さんの勤め先を聞いた興記さんは「森永乳業ならミルク、作れないかね」。和子さんを通じ、パンダ専用の人工乳の開発を持ちかけた。

「いいんじゃないですか」高津さんは二つ返事で引き受けた。その後、興記さんにも会った。物静かな印象だったが、和子さんから

は園内に住み込み、パンダの世話をしていたと聞いていた。

すぐに会社に提案したが、返ってきたのは「うまくいこと断ってくれなきゃ」という言葉だった。

パンダは日中国交正常化の記念に中国から贈られた国宝級の存在。もううまく成長しなかったら……。会社はそのリスクを不安視したが、興記さんも「できるのはおたくの会社しかない」と頼み込み、開発が決まった。

高津さんはまずパンダの母乳の成分を調べた。興記さんの協力でデータを入手したが、見つかったのはたったの3件。いずれも分析量が少なく、十分に信用できなかつた。

近縁種であるクマの母乳のデータも参考にすると、ヒトと比べて脂質やたんぱく質が高く、乳糖が低いことが分かった。成分さえ分かれば時間はかからなかつた。成分を調整し、88年3月、パンダの母乳の成分に近い粉ミルクが完成した。

しばらく園では双子は生まれなかつたが、副食として牛乳を飲み、おなかの調子が良くなかつた大人のパンダに与えると、症状が改善した。

開発の本来の目的だった双子飼育が上野動物園でかになったのは、約30年後。高津さんは双子がパンダミルクを飲んでいることをニュースで知った。動画を見て、「飲みっぷりが良い」と目を細くした。「今でも使われるとは思っていませんでした。自分が関わったミルクで育ってくれてうれしい」。双子は23日で1歳を迎える。生まれた時は100g程度だった体重はいま、約27kgになった。(本間ほのみ)



高津善太さん

濃厚な味わいだというパンダミルク 東京都港区芝5丁目



1歳の誕生日を迎える上野動物園のシャオシャオ(左上)。下は母親のシンシン 20日午前10時21分、東京都台東区、関田航撮影

祝う会に親子ら

上野動物園では20日、昨年6月に生まれた双子のシャイアントパンダ、オスのシャオシャオとメスのレイ

レイの「1歳を祝う会」が開かれた。抽選で選ばれた14組の親子らが参加し、双子へお祝いのメッセージを贈った。